

正三位式部卿藤原朝臣宇合 六首【年三十四】

五言暮春曲宴南池 並序

夫王畿千里之間。誰得^レ勝池^ニ。帝京^ニ春之內。幾^{イカバカ}知^ニ行樂^ヲ。則有^リ沈鏡小池^ニ。勢無^レ劣^ニ於金谷^ニ。染^レ翰良友。數不^レ過^ニ於竹林^ニ。爲^レ弟爲^レ兄。醉^レ花醉^レ月。包^ニ心中之^ニ四時^ニ。屬^ニ暮春^ニ。映^{スルニ}浦紅桃。半落^チ輕錦。低^{タルニ}岸翠柳。初^{メテ}拂^ニ長絲^ヲ。於^レ是林亭問^レ我之客。去^ニ來花邊^ニ。池臺慰^レ我之賓。左右^ニ琴樽^ヲ。月下芬芳。歷^ニ歌處^ニ而催^シ扇。風前意氣。步^ニ舞場^ニ而開^レ衿雖^{トモ}歡娛未^レ盡而能事^ニ紀筆^ヲ。蓋^{ナン}各言^ニ志^ヲ。探^テ字成^ニ篇^ヲ云爾^{シカニ}。

得^テ地乘^{ラシ}芳月^ニ。臨^テ池送^ニ落暉^ヲ。琴樽何日斷^ン。醉裏不^レ忘^レ歸^ヲ。

王畿、『周禮』に乃辨^{チス}九服之邦國。方千里曰^フ王畿。王城附近の地を指す。帝京に於て春游の好きは、其れ何れの處ぞや、乃ち是れ南池は小池なりと雖も、鏡を沈める如き玲瓏なり。其の勢は金谷より勝るとも、劣ること無し。金谷園は晉の石崇が造る所。而して晉の世、染翰、所謂文を作り、詩を賦する者は、竹林の徒、六七人に過ぎず。爲^レ弟無^レ兄、嵇康、阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎、是の人等が兄と稱し、弟と稱したるなり。

先哲曰く、包心中之四の下に海、盡^レ善盡^レ美、對^ニ曲裏之雙流^ニ。是日也人乘^シ芳夜^ニの十八字を加ふ可しと、則ち知る是れ以て意味始めて通ずるなり。醉^レ花醉^レ月。包心中之四海、花月吟賞の天地。頗る寛廣なるを云ふ。盡^レ善盡^レ美、對^ニ曲裏之雙流^ニ、我は竹林の徒と異なる。今日の遊びの如きは善美を盡し、花月と同じく。塵濁無きなり。雙流の水に對して、茲に宴す。樂は言ふべからず。是日也人乘^シ芳夜^ニ、春夜を芳花と言ふ。時屬暮春、而かも暮春、浦に映ずる紅桃も、半ば飛て水に落ち、岸に低るる翠柳は、初めて長絲を拂ふ。而して我を問ふ客もあり、我を慰むる賓もあり、各の得意の歌を謳ひ、得意の舞を演ず。歡娛は未盡なるも、遊は記せざるべからず。乃ち字を探り、以て各の志を敘ぶ。曲宴は曲水の宴會、王羲之が遺意

を追ふものなり。得地、春を賞するには其の所を得ざるべからず。幸に此の勝地を得て、芳月所謂三月の遊びを爲す。臨池、曲水の遺意は水無くんば不相應なり。幸に南地に遊び、夕陽即ち濱暉に到る。而かも琴樽、興の盡くこと無し。而かも不忘歸、留連して歸を忘るは小人の事なり、詩人は歸るを忘れず。昔は謝元暉、遊子澹 忘歸と歌ふ。今は醉裏不_レ忘_レ歸と曰ふ、共に身分を損ぜず。

七言在_二常陸_一贈_二倭判官留在_レ京_一 一首並序

僕與_二明公_一。忘言歲久。義存_二伐木_一。道叶_二採葵_一。待_二君千里之駕_一。于_レ今三年。懸_二我一箇榻_一。於是九秋。如何授官。同日。乍別_二殊鄉_一。以爲_レ判官。公潔_二等水壺_一。明_二逾_二水鏡_一。學隆_二萬卷_一。智載_二五車_一。留_二驥足於將_レ展_一。預_二琢_二玉條_一。迴_二鳧_二鳥之擬_レ飛_一。忝_二簡金科_一。何異_二宣尼返_レ魯_一。刪_二定詩書_一。叔孫入_レ漢。制_二設禮儀_一。聞_二夫天子下_レ詔_一。置_レ師審_二才問_一。茲_二擇_二三能之逸士_一。使_二各得_二其所_一。明公獨_二自_レ遺_二闕_一此舉。理合_二先進_一。還是後夫。譬_二如_二吳馬瘦鹽_一。人尙_二無_レ識_一。梵臣泣_レ玉世獨_二不_レ悟_一。然而歲寒後。驗_二松竹之貞_一。風生_二迺解_二芝蘭之馥_一。非_二鄭子產_一。幾_二失_二然明_一。非_二齊桓公_一。何_二學_二寧戚_一。知_レ人難_二匪_二今日_一耳。遇_二時之罕_一。自_レ昔然矣。大器之晚。終成_二寶質_一。如有_二我_一得_二之言_一。庶幾_二慰_二君_二三思之意_一。今_二贈_二一篇之詩_一。輒_二示_二寸心之歎_一。其詞曰。

忘言は、『晉書山濤傳』に、濤與_二稽康呂安善_一。後_二遇_二阮籍_一。便爲_二竹林之交_一。著_二忘言之契_一と。親友なりとの意。忘形、忘年、皆同義とす。義存伐木、『禮記』に、日短至則伐_レ木取_二竹箭_一。『詩經』に、伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶とあり。道叶採葵、漢代の古詩に、採葵不_レ傷_レ根。傷_レ根葵不_レ生とあり。伐木も採葵も共に朋友として艱難相救の意。而して作者は常陸に在り、君が京を出て此地に來るを待つこと三年。君を待つに一箇の榻を懸てあり。『後漢書』徐穉傳に、徐穉は南昌の人、恭謙禮讓なり。太守陳蕃、禮を厚うして請ふて功曹【官名】と爲す、既に謁して退く。蕃郡に在て、賓客に接せず、唯穉來れば、時に一榻を設く、去れば則ち之を懸く。

要するに一人の爲めに設く、他人の爲には設けず。九秋は即ち三年なり。授官同日、任官は二人同日なるも、一は常陸、一は京都と殊郷なり。氷壺、判官が心事の濁らざるを謂ふ。水鏡も同様なり。五車は星の名。轉じて書物の多きを言ふ。驥足は騏驎の足。能く遠きに馳る如きを謂ふ。『三國志』龐統傳に、使_レ處_二治中別駕之任_一。始_レ當_レ展其驥足耳_三。預琢玉條、玉條は「法令」を謂ふ。漢の楊雄が文に、金科玉條とあり。判官の役たる、法令を琢かざるべからず。鳧鳥、後漢の王喬、顯宗の世に葉令と爲る。神術あり、毎月朔望朝に謁す、帝其の來る數なるを怪しみ、之を伺ふ、至るに臨んで、雙鳧東西より飛來するあり、羅を擧げ之に張る。但一雙の鳧を得たり。以て後世縣令や刺史に沿用す。忝簡金科、縣令たるの任を忝くす。此の如く出仕するも皆國家の爲めなり。宣尼即ち孔子が、諸侯に用ゐられず、魯國に返て、詩書を刪定したり。又叔孫が、漢の高祖に説て朝儀典禮を制設したると其の功は同じ。天子下詔、置師咸審才周、三能は明白に斷じ難きも『史記』に星名即三台也、三能色齊_{タイ} 君臣和_シ 不_レ齊爲_二乖戾_一と三台が其の所を失ふは天の不祥なり。逸士が其の所を得ざるは國の不祥なり。適材を適處にもちひ玉ふ、故に臣僚も各自に其の所を得て、安住する。獨自遺闕此學、判然と解し難きが、要するに地方官に榮轉するのが當然なるに、明公は獨自から此の問題に觸れずして、依然京に留るとの意ならん。理合先進、還是後夫、明公は先輩にて、我は後輩なり。先輩が依然として、後輩が出世するは、それは譬へて見れば、吳馬瘦鹽、人尙無識、此の八字、未檢出典、楚臣泣玉、世獨不悟、楚の卞和が玉を抱いて荆山の下に泣き、而かも愚劣なる國王は何度玉であると紆べしとて、沒分曉と云うて悟らぬが如し。其の人の正直なるを表はす。而かも松竹の貞操、芝蘭の香馥は、自然掩ふ能はざるものあり。鄭子產、春秋鄭の大夫公孫僑の字なり。東里に居す、又東里子產と稱す。博治多聞、而して政治に長ず。鄭の簡公の時より國に當る。定公、獻公、聶公を歴て、凡そ四十餘年。時晉楚覇を争ふに當る。能く大に事ふるに禮を以てす。而して苟くも其の欲に徇はず。晉楚皆之を嚴憚す。政を爲す。寬以て猛を濟ひ。猛以て寬を濟ふ。孔子稱して惠人と爲す。又稱す君子

の道ある四。其己おのれを行ふや恭。上に事ふるや敬。民を養ふや惠。民を使ふや義。幾失然明、然明は春秋鄭の人。姓は駸名ちゆうは蔑べつ。字は然明。鄭の太子子産の爲め用ゐられて鄭の爲め功を顯はす。晉の叔向。鄭に如くゆ。蔑、容貌醜惡なり。器を堂下に執る。一言にして善よし。叔向が曰く。必ず然明ならん。其の手を執て堂のほに上す。叔向は然明の善を知りしなり。子産は然明の智を用ゐしなり。甯戚は春秋の人。家貧にして資無く。人の爲め車を挽き齊に適くゆ。偶ま桓公の出遊するに遇ふ。戚、牛角を控いて歌うて曰く。南山絜サシタリ。白石爛ラシタリ。中有鯉魚ニ長尺半サ。生不遭堯與舜スハトユツシニ。一。短布單衣纒ワツカニ。至ル飢カン。從ヨリ昏飲ン牛至ル夜半ニ。長夜漫漫何時旦イステレカタンナラン。桓公聞いて之を異とし。召して上卿と爲す。今日も昔日も。人は知己に遇ふこと難し。才を抱きながら空しく草萊に沈吟する人幾箇いくはくぞや。然りと雖も。『老子』には、大器晚成とある。早成のものは早朽し易し。明公も如し我が言ふ所の意旨に於て得るあらば。我が此の詩を作るの寸心すんしんは達したるなり。以て君を慰するに足らん。

自リ我弱冠從ニ王事ニ
風塵歲月不曾休一
褰カケテ帷ヲ獨坐邊亭夕一
懸テ榻ヲ長悲搖落秋一
琴瑟之交遠相阻ヘダタル
芝蘭之契接スルニシ無シ由一
無レ由シ何見ン李將ト鄭ト
有レ別何逢ハシ達與レ猷一
馳ヲ心ヲ悵望ス白雲天一
寄セテ語ヲ徘徊ス明月前一
日下皇都君抱ク玉ヲ
雲端邊國我調レ絃ヲ
清絃入レ化ニ經ニ三歲一

美玉 韜^{ツツム}光^ヨ 度^ル幾^ニ年^一
知己 難^レ逢^レ 匪^{ザル}今^ニ耳^一
忘言 罕^レ遇^レ 從^レ來^ニ 然^{シカリ}
爲^ニ期^ス 不^レ怕^レ 風霜^ル 觸^ル
猶^シ似^シ巖^シ心^ニ 松^ノ柏^ノ 堅^{キニ}

弱冠は二十歳前後を謂ふ。風塵は字の如く風と塵。杜甫、薄官走風塵の句あり。王事即ち國事に奔走して、曾て休息せざるなり。褰帷、褰は袴なれど、動詞の場合「カカゲル」と訓む。邊亭は亭の名にあらず、京に比較して常陸は邊土なればなり。懸榻、知己來らず故に下榻せず。琴瑟之交、芝蘭之契、良友を指す。即ち倭判官なり。李將鄭「左傳」に鄭以爲東道主行李之往來、供其乏困。今日は李と鄭との如き人無し。達與猷、晉の戴逵と王子猷なり。猷は月夜に乘じ逵を剡溪に訪ひしも、逢はずして返る。白雲天、明月前、遠く隔たるを表はす爲めと、白雲の如く、又明月の如き友情とを表はす爲めと、一意を含む。日下は天皇の御膝下を謂ふ。雲端は都を去る遠きを謂ふ。抱玉「判官たる職を守るを謂ふ」、調絃は琴を調べるなり。琴を調べるは娛樂の爲にはあらず、治化の道に在るなり。美玉韜光、韜は弓衣「ユミノフクロ」なり、光を藏して外に表はさざるを謂ふ。此の四字は漢の孔融の詩なり。今以て倭判官に譬ふ。知己、忘言、忘言は即ち知己、知己は即ち忘言なり。人生眞の知己は遇ひ難し、古今と無く同一。而かも風霜の昔は耐へ得て、一生涯、巖心松柏と同じく、堅きを期すべしとなり。

此の篇、韻を換ること二。而して三年此の知己に會せざるを傷む。又集中の傑作たるを失なはず。

七言秋日於左僕射長王宅宴

帝里 煙雲 乘^シ季月^ニ
王家 山水 送^ル秋光^ヲ

露 蘭 白 露 未 催 臭
泛 菊 丹 霞 自 有 芳
石 壁 蘿 衣 猶 自 短
山 扉 松 蓋 埋 然 長
遨 遊 已 得 攀 龍 鳳
大 隱 何 用 覓 仙 場

季月は一年の終りと、四時の終りと二義に用ふ。今は秋の終り、九月を指す。此の晩秋に當て、王家に於て秋光を賞送する。秋光の景色は乃ち下の如し。白露は盛んに蘭を露すも、葉は茂きも、花はいまだ開かず、臭を催さざる所以。丹霞は菊に泛ぶ、是れ芳香ある所以。石壁蘿衣、宅に沿ふて石壁あり、石壁に挂るに蘿衣あり。而かも春日にあらず、ツタが短し。門扉を掩ふの松蓋は、埋然長。蘿衣は短而小。松蓋は長而大。遨遊は樂遊なり。攀龍鳳、『後漢書』に攀龍鱗附鳳翼の語あり。龍鳳は天子に譬ふるが本義なれど、皇統の人なれば不妨。此の席に陪食するを謝するなり。大隱、小隱は仙場を求むるあらん。大隱は、市中に在て仙場を覓めざるなり。王康琚の詩に小隱隱陵藪。大隱隱朝市とあり。

七律としては、句格整正、此の集に在て上乘の部に屬す。

五言悲不遇

賢 者 悽 年 暮
明 君 冀 日 新
周 占 載 逸 老
殷 夢 得 伊 人
搏 擧 非 同 翼
相 忘 不 異 鱗
南 冠 勞 楚 奏

北節倦[△]胡塵^二
學類^ハ東方朔^二
年^ハ餘^{レリ}朱買臣^二
二毛雖^{トモ}已^ニ富^{メリ}
萬卷徒然^{トシテ}貧^シ

題して悲不遇と云ふ、例の少なき題目なり。迷懷又は感慨、又は言志、一にして足らず、少年諸子は此の如き題を學ぶべからず。古訓に悲[△]不^レ遇^{ルコトヲ}あり。何人に遇はざるを悲しむ者か、作者が自家の事を敘せしにや、人に代て作りしものか、判然せず。自分とすれば身已に式部卿の高官と爲る、何の不遇かあらん。官を罷めて後の作とすれば、それ一種の不平なり。孰れにしても題目の愚劣なることは否定すべからず。賢者^ハは、志成らずして年^ハの暮^レれるを懐む。明君^ハは、斯民^ハの爲め日に新たなるを冀ふなり。周日^ハの日の字は意義無し、周の時の意義なり。逸老^ハは呂尚、即ち太公望、舟に載せて引き來るなり。殷夢^ハは、殷の高宗武丁、夢に良弼を得て説^{エツ}と曰ふと、求めて之を得、立てて宰相と爲す。伊人^ハは斯人^{コトヲ}なり、偉人と改めて可なり。周と殷と國の前後、後を前出し、前を後出するも、是れは妨げ無し。搏^ハ擧^{ハク}、搏^{ハク}と搏^{ハク}と同じからず、而かも『莊子』に、搏^{ハク}扶搖^{ハク}而上^{ルモノ}者九萬里と一本に在り、一本には、搏^{ハク}扶搖^{ハク}而上^{ルモノ}者九萬里とあり。本義より觀れば、搏^{ハク}は「ウツ」撃なり、搏^{ハク}は圓「マルメル」なり。訓の上も、形の上も、已に異なる。而かも『莊子』に一定せざる本^{ホソ}あるは、遂に解すべからず。余は私見ながら搏^{ハク}の方を取る。然らば此の句は何を意味するや。翼は鳥類、鱗は魚類、一は天上に騰り、一は水底に潛む。天上に登る類の物種種あるが、其れは一一同じ翼にはあらず、水底に潛む類の物も種種あるが、其れは一一鱗^{ウロコ}の異なるものにあらず。高能でありながら潛む魚もあらん。低能とて潛まざるを得ずして潛む類の魚もあらん。又天上に登る鳥も、自力にて登る奴もあらん。他力にて登る奴もあらん。而かも不幸にして登る力の有るものが登れず、水を撃て躍れるものが躍れずして潛むものも

あらん。所謂不遇を悲しむ所以、其れ此にあるか。相忘は彼も此も忘れ是も非も忘れ高も低も忘れるの意ならん。南冠勞楚、奏は、南地即ち楚國のため忠を竭して哀歌を奏し、最後水に没せし屈原。北節倦胡塵、北地に捕虜と爲り、而かも漢節を持って狄地に十九年も勞せし蘇武。學類東方朔、東方朔は漢の厭次人、字は曼倩。武帝の時、金馬門侍中と爲る。時に諷諫を以て、帝の過を救ふ。文辭に長ず。答客難の一篇、後の文豪楊雄、班固以下皆之に倣ふ。年餘朱買臣、朱買臣は漢の會稽吳人、字は翁子。家貧つして讀書を好む、常に薪を賣り自ら給す。且行且讀、妻之を羞、去らん事を求む。買臣曰く我年五十當に貴かるべし、今既に四十九、汝が苦しむ日久し、我が貴きを待て當に汝に報ゆべし。妻聽かず去て農夫に適く、武帝の時、巖助なる者、買臣を薦む、拜して中大夫侍中と爲す。東越數、反するを以て、復出て會稽太守と爲る。樓船戰具を治し、東越を撃て功あり、都尉と爲り。其の後吳に入る。故妻、其の夫と共に道を洒掃す、買臣之を憫み、呼んで後車に載せ舍に歸り、園中に置く。故妻慚忿して自ら經れ死す。要するに學問は東方朔や、朱買臣の如くに力を具すと雖も、武帝の如き明天子に遇はざるが故に、猶貧に苦しむとの意なり。二毛、晉の潘岳「秋興賦」に、余年三十有二。始見二毛。唐の駱賓王の詩、結綬疲三入。承冠泣二毛。二毛は上の二句にて知る、白と黒との髪がある意味。貧とも富とも言ふこと能はず、此の篇の意は、白毛が多く爲つたから、書物も萬卷は讀破したり、而かも舊に仍て依然貧窮なりとなり。

此の篇、前述の如く、徹頭徹尾、自他古今共に不明なり。東方朔も朱買臣も不遇の人にあらず。逸老も伊人も共に不遇の人にあらず。悉く出世して上天したる人なり。其れ等の人人を羅し來て以て、悲不遇の題下に置く。讀む者之を解する者幾人あるや。結末二句に依れば、古人は此の如く始めは苦しみ、後は出世す。然るに我は白髮の年、萬卷の書を讀んでも、いまだ明君に遇はずと解する外なし。正三位式部卿たる人の作が眞とすれば、文字を以て詐偽に類することを言つたに過ぎず。余は此の如くならざるを冀ふ。或は余の洞徹せざる罪ならん。賢者の叱正を乞ふ所以なり。

五言遊吉野川

芝蕙蘭蓀澤
松柏桂椿岑
野客初披薛
朝隱翹投簪
忘筌陸機海
飛繳張衡林
清風入阮嘯
流水韻嵇琴
天高槎路遠
河迴桃源深
山中明月夜
自得幽居心

芝と蕙と蘭と蓀、盡く香草。澤は水の常に霑す處。松と柏と桂と椿と盡く貞木。岑は山の高き處。吉野には香草と貞木の多きを曰ふ。野客字の如く、野夫樵客を指す。是の人等が初めて蘿薛の類を披き、朝隱、朝廷の官に隠れる人が、此に來て翹時、寬いで遊ぶ。簪は簪纓。簪紘と成語して、官吏の冠を曰ふ。官吏と曰ふ様な堅苦しい氣持を捨てゝの意を投簪と曰ふ。忘筌は、『莊子』の語。外物篇に、筌者所_レ以在_ル魚。得_レ魚而忘_ル筌。筌は魚を捕る「ヤナ」なり。陸機海、晉の陸機が、文詞は海の如く深し、而かも善く之を學べば、魚を得れば筌を忘ると同様、陸機に倣つたと云ふ痕跡の無くなるを言ふ。飛繳、繳は矰赤と成語して、絲を付け鳥を射る具。張衡林、漢の張衡が詩賦は林の如く茂し、是も亦善學し、鳥を捕ふれば、繳を忘るゝを要す。而して清風を聞けば、阮步兵が嘯くかと疑ひ、流水を看ては、嵇叔夜が琴を彈ずるかと疑ふ。天は高く見ゆるを以て、槎路の遠きを知

り、河は支廻して桃源の深きを知る。槎路も桃源も超人間でなければ、到る能はざるの處なり。山中、自得、此の如き幽邃の地、明月の夜、特に幽居の心を自得する。自得は自覺と同じ。眞に幽居は此の如き處にあらざれば、嘗て知るを得ざるとなり。此の篇は前詩の如く、難すべき點無し。

五言奉^ル西海道節度使^ヲ之作

往歲東山役
今年西海^ニ行^ク
行人一生^ヲ裏
幾度^{ヒガ}倦^ム邊兵^ニ

奉^ルの字、爲る意味、節度使は唐に始まる、一地方の軍政、及び行政を總轄する官。去年は東山に在り、今年は西海^ニ行く。役人の一生、今日の所謂浮草^{ウキクサ}。東西南北、定め無し。倦^ム邊兵^ニ、帝京近畿を除く外、皆是れ邊土なり。其の邊土の兵を使役することに倦むとなり。此の詩輕輕に敘し去て、却て唐絶の佳と爲る。長きを弄するもの、此の篇の短なるに及ばず。